海内
奇談

七篇
五編
下

14
3157
50(15上)

14
3157
50
(15)
止

妙竹林話七偏人五編巻之下

東都　梅亭金鵞編次

○

節季ぶりの年中小千代よろづ代の行とゝまるし引摺腰の揚づ紀少ゝ寸平腹鼓の雪紀を知る所老のすゑの世話

若紀も波七人の狂楽ゆゝ祝父の揚や慈母の脇のめぐ

この春小社礼楽をこゝ小掃ざめの狂楽亭の大津

をとりまゝ紀又ゝ巨燈へ寝ころびて相もかゝるぬ下酒肴

の重箱「秋百怪談」とあるとぬぎうで連中ぬぎうで落ち
あつさの今月ぐちあてぐらう「戸棚の中うち現はる出
と小麦の粉の化ゐ出て五ぐく踏ませられうけるア
「波間天宮」とうれしのでは大暑二さぐん丈ひて
あてまるまさア「年つきまとつふ表紙と付て何う
「下ちあうう校付ぢやア極へう「雷獨小酒ぐ弁ろくとさ
婦人の「めもあア「自己アさうとしてさめぐ拾て先利
焼芋と二十八ぐんとうしのぐうう胸ぐ焼てこて入られ出へ

うう「ちと流行遅すぎるあ人付で食の礼ふ全れ入ふ和
ら相へぐあ沖と実さう義者とあげうう通て浄瑠璃の稽
古所あるに義ぐ実さう月ぐいうとト手方へ出方へ泊
つと義ぐんす来さ落ぐ所「行でもてんと面白しと
先業ういちのあふ凝り開まつて出つて入ぐ是を
連中ちもで「人も丘と出さあへ祝者行や義理ちうの
とちぐあてうさうう行ぐらう「奴もあうく樂ちらいぜ
「まつうやア実ぐ員ちも底へ礼ぐつうさうう「彩の蓋を

ゆてゐる者と思つて居るのぢ「夢極乳のるるまきふやァ
家のめぢ同見ァ六月先ゑゑゑる祝者ゆをちゆ
て居て既ふタァも接摩といふので大苦しゑと出つと
のサといふのいれでも祝父が一盃きげんで巨燈へ注く
ぶー義林るのい猪化さんときめて居ゑゑ「ヲイ祝父さん
天気ちゆと叫いて上ゑゑと言て券中へゑつ注くと祝
父ぶ大抜びゑ行ゑで出額をけとむゑゑと指上ゑゑ
行ゑゑと思つて薬瓶の上と指てえゑと指の棚干ふ

付て居る撥家孫ゑこゆゑと接ゑゑふ手孫ぢゑゑとまと
でも毛ぶ生て居ゑゑと凡の先でちゆくくと指んぢゑら
祝父が足云とくゑつとんぢゑゑ牙振を右ぶゑ「ア痛
て。ゑ月代をむーつて二の指をるのぢイ悪地ぢと云れて
ひ方も悔ゆ者とのョ結ゑゑ凡て居ると思つゑゑて言く
注ゆ行ゆゆゆァ者指へ「夫で市ぶきゑへとのゑ「まとぶ祝人
祝父の天云といふのぢ四人和の面ゑふ関いのぢゑゑ抓いゆゆ
とも利ゆ人といふ盤で指ゆ拳とゑらへると堂堀の角の

やうなものが出来るぐらゐ波角のやうなところでカ
「ポいふ」四角のようなところとコツ〳〵と打つけると親
父がごん〳〵貴をさつこめ「コヤ」と雑帝ふとまつ木槌あん
ぞで打つまて耐るあらといふ〳〵貝ヒが「あい」小木槌で打く
るめうに処のところで学〳〵ヒしてのごと巣源の角と丸
まて入せる〳〵「イヤ減法界ゑとまやゞぐると大河
らまヒサるヒ千巻でも有るエ親父の掘大が出来ま
きとえさやふ口口ぐ〳〵けふ為て来るつこのヨ巻とする

ちひ方いをまるゑ顔で「エ親父さん将が考ゑとちでやるのでス
ぶん
ろうまついとえをまんるもの河拠小い頭ト「ぶ悦ぐ〳〵
けふ為て来る〳〵ことこ〳〵「巻地めぐと巻〳〵ひと
して居ろ〳〵宜ぐやアわ人ろ更〳〵稽トコ〳〵学て居ろう
ち挑磨もわー秋の学と来て学なるつるとまるゑひ
「エ親父さんちつと見力といふのを巻ヒて上巻ろと学ろう
親父が「て在でき人天巻人打き毀ぐ来ろゑ巻人稽ぐの小巻
で踏るとくらまて耐るあうと汲の外の不巻ち仕方ぐ

われ〳〵はうらぶりで指まよとうり朝鮮日記の商屋のごんと
いふのと例の笑ふこうぞうをつけて出せさう殊外出来
ふるあい出ふあらぶまが茶順ぞ一ひき繋いでまるぶ旅行
屋ふ撮影屋のかけ合不服ふ名古屋のさやあてザそう
やッぱさやうふ出つて出せせうぶ嘘ごと出ふあ〳〵出処で一
だんやつてえんせやうう「ナンノ嘘ごとも出やッ者へち
ゆの上ひあの〳〵食ぶ初つて居ろ〳〵今仲汲やうやッ猫のい
ぶ〳〵食の稼ぐ〳〵と出つて出せれば宜うつと「下戸のつぶ〳〵合

ぶと有とあ〳〵出て飛ぶけ出ぶと合ッ「まッアサ雑ぶ小出ぶ」「角
も出ふ郭〳〵者ふ行と者ふと者ふ〳〵ふ乳ぶ尾のとと出ぶ出と
あげて来て居ふけ出と維出ふの牡ふよ「あ〳〵あて者と
居ふも不者ふ大食の父母の肝やたぶさん」といふのぶ
あ〳〵者ふ〳〵陸ふ出ふ出て稼ぶぶ行のとッ者ふ人
菜や大根の番頭とおんなし「指式であつふ塩と掛ふ
掛と来ふして指へあげるのぶ「そうやッ下ちさんの云のふ
遠へ人自己の弓弟ふも処ぶふ汐ひとあふある

小やの第一朝煙とうて軍艦よりあるくるやうにて
れんとあるひいるの支ぐるの月の物とそ一まるぐるの長
べるとまぐ書きくるを花への小煙こんで参ひ夢ろのとうえ
てあるとゴヤンと雪く遠の者小ふくちまち腫ものと覚され
くくくくと処ぐと思つて参て見ると親父や義母ぐ火事の遠み
すくつて居くくくハテ然る合朝とそとやくくふ先と
つちぐ逃すとくくと高りく揚校ぐとと指ぐ人と親父ぐ頭へ
九の字まと出ー今朝ら遠とみぐく長焼ぐあるあくくと大火事

ぐくくく不測ふとくいふものぐと独くくくくぐ逃も煙花へ
ので今ふくと遠ぐ石所のぐっぐと人行と馬無げくくを
手処で仕方ぐれくくく食と一所ふまくく森の字平サぐられ
と乳ふ取て居くくいふものへ強いものでいつの煙むくく変
くび服ぐ変くくくくくれぐくくふ稼ぐで徐く起み茶令
の下と抹つけて先湯とくくと茶とくくくくと思
つくぐ抹くくぐれくくのでくくくくくくくくと仕処くの
遠ぐ変くくくくくくくくく

まこと果もだこぐ今こう孫ごでも有めと少年の孫よりめつて空恐うんとして居てそぶ行ふも毒うぐわの
で伝よりこ下孫入さこうせと折角さんざ夜奥城
愛げて横ふ成さと思ひあせへ天宝の上てカワくと烏
が鳴てとるこう今夜だろうハ上加減と思つて出さ多苑
ると家門対らぞ手処ふ居るので。ハテこくと考つて
男ふ仮もこの稽こ涙ざ母こ教拝金ざ母紀ざと人の門
で我と打あざこ稽頬へ出て居ると大陽さ多ざ西の方こう

異とかつて居るので恐ふ見い大変行拝ことまと往ふ
又きづまくなこう結あこうの容ふと居ふ宵こ変く
眼と見ーとのでこ竟こうくと眠つてと思つて居さこうく
ざこうくのこうくの又こうくの大こうくもん小こみて
こうくく法衣て着せてこうくく減法寄ふこうく
赤ぢこ「ぽのこうくく仏のこさ方わ牛の小後のこうくと
又とこうふ恐変長いこうくで鳴の鳥ざと思つてこのぶ鳴
へかへる夕鳥朝日のこげこと怪んざこのぶ夕日の居行こう

何にぞうすを喰ひ盃を戴いてぞ
と雑煮。三汁五人ぶ貝ぶ
角ふ盃をして呑ませやうと思つたのぶ三盃ふ成て仕
舞ふ腹一杯ふ成ぬ晩飯ふ
ところぶ飯物ハ貝殻蒸と一盃半ぐらひ
ハ沢食一ぱいぶ成と豆腐とろろへんぐり汁へ
まつて帰て来ると忽地腹ハへつとり
登ふして十二盃と考へ
られぬと思つて直ふ天麩羅とおろし数を食ーまつて
まこと十二盃と考へ及いうどんの紀巻と出うかや
と思ふと飯物ふ何時まさるとうち丈でお仕舞さまると
後で合茶でもあやアあるとうと大きふ昔話ふ
さうぶ行を来ると思へバ夕飯ふ
と寝ると乳といるあさせ行ふ
せやうと蒙行ふ
て来る彩ふ

幸抱ぐぶ出て来るるさしオ八月ま祖母と連てお寺参りと
出るけとのヨ為ると年寄ごもんぐるる弁へ参りやア参ば
とよのとゆるぞふ年内服のお菜ふ煮こ芋をせめぐ
のぐまが駆まてきとと入て歩ちぐるるぷイと四庇へ
と放と並んで歩ゆて居こ女連中ぐ参るるる自己と
居るる居でまるれ人けまど渋ると顔をて出とまと
一ツぷイと放さのでる新造や年場ぐ一どきふ多多と笑
ひ出ー自己ぐ放んぐとるふもんぐるる参るる西ぐる

足やアぐるのき行と耐へらまめちやァれ人ら手用女連へ
横所へまぐつるる祖母きんふ後ぜぐとぐつて庇と放の
八橋巻ーてんぐ世人沢米のめぐ自己ぐとぐふる居で
まるれ人と記るる四政ぐへる庶ぐるぐやァぐいぐ法も
と頭へ年まるへんぐ放庇とまるめぐ放庇ち珠数の人
きへ玉とんまるーで南云ぐるぐぶつるとナ過とるぐへ
てへ放庇と一ツぷイと呼ーー南云ぐるぐぶるるとと四放己
ぐへてへ放庇と一ツぷイと呼きてのへぐ念佛の数れるる

又一つ少し木魚の音をさせる為に紙屋を精舎の傳のこ
ゑい諸ぎ申う云常と笑くちうこゝとゞ法論でいと
て来ぶ自己の故底も紙屋どうこの精をもぐ法
よむ云者うと笑くのぶうう行ふも悪いとゆもい。やし有
かゞこの南云あゝぶ南云この法ぶ。ブイ。ホイ見ぶ牧
ちう少し来うこと云て法しと顔をして居るのぶうら
行とゞぶ付らとめゝぶやァ和ゝうたぶうちちう寺
のおゝ来ると自己ぶ紀と笑て法申ひぶふ墓の様

塗をして垂るのふう。ネワト承知と所姉桶へ水を汲ま
とこ乗塔場へ出ていつとぶ初秋のうち来つゝきうぶう
ら行とぶうちの家の墓所ぶうこゝとて来まうてかうう
きし遠ま同ちサ然けとも楽アさんの来るのと待て
居るのも口惜ぶと思ひ処いゝを又て歩行と業冷
故屋とゝ自己の家の家名を付て石塔ぶ来るうう行
こんぶうと先掃除ー水と上て清て居ると初人親
父ぶ出うけて来て自己を横目できまうゝ又ぶう

とよって来むう。ハテ名遠つてうとそんなに浅方のそ
うで底の深ぐ。ブイとそるうう貴と神一隣りの墓場
とのぞいてえると祖母が掃除として居るうう周章てそ
処へ出やしうぐ仏様がんぐてうんてもそのあの墓場ぬんぞへ
笑えて居るうぐ善さそうぐョ「丈でも宜敷」と云と
自己アもぐ墓場どころ寺の名も知らず孫へう家へ
帰つて来て遊うョ「出方」こんふと遠つて羅漢のそ
うう出へ押ぐ。あくぐ羅漢とうのへ減法界の骨

のとまるのぐ。「ムウそそる」「坊孫へ出る湯番へ用
ぐ知つて明神坂の下まで出と米を二十俵ぐう積ぐ
車とり上て居るとうぐ高ぐ上うねへのョ乗うう
変らぐ羅漢ぐと云つて手伝て押て来つてぐ分け
殺の笑まるのの小やア車力も強るいとのサ仏様とい
の小車かてきん背ぐとまるんぐうう兵。ウンウンうう
計つてぐ代方い。名ホイ名んさうホイそ処るホイ。イヤ
嘲ぎうぢやア可笑くねへ。ナイ兼貝さん家のそと

横のまくら人突張て貰て長ん杖人「かうしてう」「よりく
あるかて人。エヤ〻ひ業員さんの子ぐ車の横木ぐゼト業め業
の二の袖と振うこぐと右つう振こ徒のところへ袖と
あて「名ん」ホイ名ん坂ホイ手処るホイ「ア痛へく」。コレ
京のとひどいるゆとさんざイ「自己ぐ押う〻〻ぐん〻〻
物ぐ〻ー杖人右腕さうやア痛へ。名んホイ杖道ぐホイ
お風ぐホイ「見さ痛へとい〻〻ア〻いて〻〻「痛う〻〻う
て行ぐうて〻〻ゆやア右ぐ出ぐうて居て腹ぐ背ぐ

杖見る所ぐ我慢と右ゆへアウンゆ〻ちつとぐッレメ
〻。ア〻名んホイ名ん坂ホイ名ん「ア見と行腕さるのぐ
ぐ折て右ゆふゆア〻い〻〻〻〻〻〻「チョッそん
右〻〻腕悪して出ゆと〻「腕悪して出ゆと〻も押う強へ
「押ぐ法右〻〻車う坂を上つとのぐア「坂と上つとも
う宜〻〻〻「ぐ〻しゆ〻〻ゆう電と差つて出ゆつぐ
「居ぐゆやぐゆう〻〻ゆ杖人「ヘン悪ア下道ゆ人の義徒
のさゆこげをして「義徒と言やア自己も腹やぐの義

痛をゑさせ然も今朝のことぐろ脊中がむづく痒いゝ
佐ことて奴ぐらごさんゑとことけんゑの手へ飛いぐ光り輝
く朝日を浴ふまひあゝ裸ふて揚げとうゑると陽元夏
とうゑとゆゝゑ風ぐ脊をぢふゑぢっぷき押潰してと思つて
ぐゝハ谷の合戦よ然谷の法師実ぐ女の方丈数盛
と組ふせとのとおん出てで勿地ところふ喜ぶと痛
手ゑの武者どころもゑゝぐれば命をとすみ来ぜんと
虚空ゑ飛ゑゑと云てゐると長くうて社へ行ナイヤサ

命を助けて貰ゝと思つとけまどを体がけへ体ぐ痒
化物へうせぐ人ぐ困ると云て放胸よりとまべ虫振社
生ハテ何の祟ゑゝと盗えゝぐ脇ゑゝぐ紫ぐゑゝ
法ハ蓮の皮と割りとつて曲めへ入ゑその中へ風の方
丈数盛とおひとゑ上ゝゝ切とゝ蓋をして大坪のゝ出
ハへ来まつて蓋と人肌ぐふ温まゝゝ蓮の皮と割ド
きふして冠せと切ぐ長歌の祟ゑゝ小痛ゝと人ぐ有
ゑゝゝの何でもゑゝ風の甘酒ゝ拙者彩製ッ

んなる陰症をいやア。ゝ暴まとけくらア「傷こん寒ぐ類しい
ろ皆ふ成さ自己も乳の分ゆうぐ遊いけまどび前ふ成
て法ぐ出ふふ人の紀よ成そど刺の悪いまの紀へ実
記ふ成までい乳ろけ女紀の丹精ぐ大変でまどもぐ
腹へ移ることろう出て病人よ成て差まい月ろ人精のろ中
乳丸も毒ぐて見も毒ぐて甘いまの世も冷まび移ろ
しのまぐ有ても仰ろろといろて見もせぐ差く出ろな
て丸を体まを辺つて指ぐと大変ぐの丸ひのろちふ

ひろろそ処へ対出てと横小ろまび抜い冷まび
椅まで眠つて湯のやろか粥で命とたまぐおぐろう
徐ゝと赤まの世話抜車の液のもまびの負いかへて
差ぐと働き古用のろちの異い日も乳よ甘よで乳分れ
差扇出も容易よ差まぐ色の陳衣の差サふも
小液よ異ふ紀まて温まる日も法ゝてらまふのと編
して差らしく成べ脂毒疱疹小疾まぐもう抜紀れ
世話ぐいやまび大病人秋況の労れのいまひもまく衣の

白蓋付
茅舟

目も悪ざ小結ぶると子の放さるぬなぢく歩行怪
家とさせまの美百一ぶるの出でも出ぶるるの業ぶ
こうじて者とする地獄菩薩の百万べん免子物社会
の業飯ぶ七ツ八ツの頃ぶして主家漬の十家盛の
稽古小田けと追出しても表へ出るといさづぶや嘘乞の
浅小乞と捜せ若めや常のかぎ張ぶ止んざとやぶ入
と稽古処ぶぶ行猛張ても和尚のつぶ地獄とぶど
かぶ一寸と一度ぶ病つまで祝ぢや浮雲ない。ホイ賀る

義の足本の足で、あ如実「ヨもう止て異母兄祝父の
極と名ぶぶ乞ぶ義母の揚とかぶぶ矢さぶ中まで云
まると哀ぶぶ成てとて入らまれ人食い義祝ぶあぶぶ
孝行を番ぶといけまど自己ア妻さんの云ぶぶ
義母や祝父の世話小成ぶこの小汐ぢぶ一ぢいでも過
祝へぶぶその悪とけんぶて入と出ぶても義母も祝父も死
死で有まつて祝といふものハ一人も無ぶぶ化のまの浦
ひまぶぶぶて耐へらまれ人自己一人ぶな行の国果て祝

ふ和尚よ〳〵ヲイ〳〵ヲイ〳〵ヲイ〳〵長さそう〳〵泣ぎとも宜だや
和尚ろ〳〵かう〳〵哀〳〵ろうて和尚〳〵ヲイ〳〵ヲイ〳〵ヲイ
ヲイ〳〵滝拾よとびう〳〵ろうて出ぎうと入る来る郷さ源べ
湯コレ〳〵郷ろの世祭ふ屋ろ泣ぎ〳〵花ぎろ多く京ト作那
の流ふ来ふ沙拾ふ出ぎ笑ひと縁まで折ろ〳〵ヲホン
と〳〵して笑ぎ〳〵ひ大ぎ多ぎ続て上ろ来ろ〳〵郷の義ぎ三系
笑さる紙切形の宮殿ぎげすぎ乃連中のぎ乃巴。ヲホ美
ふ恐れ入ふ哀ろ〳〵美谷ろう和尚ろ〳〵ろぎて人義